

令和 4 年 5 月 24 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K17842

研究課題名(和文) コピュラ文名詞句の解釈多様性を扱える認知語用論の構築

研究課題名(英文) Toward a cognitive pragmatics dealing with various interpretations of NPs

研究代表者

山泉 実 (YAMAIZUMI, Minoru)

大阪大学・言語文化研究科(日本語・日本文化専攻)・准教授

研究者番号：80592336

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトでは、「コピュラ文名詞句の解釈多様性を扱える認知語用論の構築」を目指した結果、「名詞句の意味とは何か？」という問いに認知的視座から答えを与える「指示参照ファイル理論」を構築し、それによって潜伏命題名詞句、潜伏疑問名詞句、所謂高階の変項名詞句などを分析した。また、この理論の基盤となる学説が展開されている本を2冊共訳し、出版した(『思考と意味の取扱いガイド』『なぜヒトだけが言葉を話せるのか』)。

研究成果の学術的意義や社会的意義

指示参照ファイル理論(指示参照ファイルという概念を用いて、それを持つ者の行動、経験、知性などの説明に寄与する理論で、言語も当然その説明対象に含まれる)ができたことによって、名詞句一般 特に、潜伏疑問名詞句、潜伏命題名詞句、所謂高階の変項名詞句などの意味的側面の理解が深まった。この理論は今後、構成のアンチノミーのような形而上学の問題や、フレーゲのパズルといった言語哲学の問題の解明に役立つことが期待される。

研究成果の概要(英文)：This research project aimed to construct a cognitive pragmatics theory that can deal with diverse interpretations of noun phrases in copula sentences, and as a result, I ended up constructing "Reference File Theory" that sheds a new light on the question of what is the meaning of noun phrases, and, using the theory, analyzed concealed propositional noun phrases, concealed question noun phrases, and so-called higher-order variable noun phrases, among others. I also co-translated and published two books in which theories underlying the Reference File Theory are developed ("A User's Guide to Thought and Meaning" and "Speaking Our Minds").

研究分野：言語学

キーワード：指示参照ファイル 名詞句 指示参照ファイル理論 意味論 語用論 意図明示-推論コミュニケーション 潜伏疑問 潜伏命題

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

おそらくどの人間言語にもある基本的な文型であるコピュラ文(「[名詞句 1]は[名詞句 2]だ」や“NP1 BE NP2”)には、措定文、指定文等、様々なタイプがあり、日本語でも他の言語でも、概ね同じようなタイプ分けがされている。これら各タイプのコピュラ文は、意味論的に異なるとされてきた。例えば、西山(2003, 2013)では、各種コピュラ文を特徴付けるのは、2つの名詞句の文中での“意味機能”(指示的名詞句、叙述名詞句、変項名詞句、値名詞句等で、主名詞の語彙的意味とはあまり関係ない)と名詞句同士の関係とされ、全て文法のレベルで捉えられてきた。

各種コピュラ文が文法レベルで区別されるということは従来ほとんど問題にされてこなかったものの、再考の余地がある。つまり、各種コピュラ文の違いを意味論—文法・語彙の形式がコード化する意味—のレベルで捉えることは妥当だろうか。また、どの言語も同じようなタイプのコピュラ文を有しているのは何故かという謎も残されている。

語用論のレベルで考えると、コピュラ文は形式だけではタイプが判別できない場合でも、言語使用の場面において聞き手はあるタイプのものであるとわかるという事実がある。文法研究で行われているように文法レベルで曖昧なコピュラや見えない文法構造の差を想定したとしても、聞き手の判別の主な手がかりとなるのは、文の解釈過程とその結果のほらずで、各種コピュラ文は語用論で区別できていることになる。つまり、コピュラ文発話の解釈過程・結果には幾つかのパターンがあって、それによってコピュラ文の各タイプが同定されていると考えられる。

では、その解釈パターンに加えて、文法における意味論的区別としても各タイプのコピュラ文は必要かという点、修正版オッカムの剃刀—意味を不必要に増やしてはならない(グライス)—を受け入れるならば、それらを想定しなくても現象が問題なく扱える場合には不要であるどころか認めるべきでもないことになる。

2. 研究の目的

上記背景から、各種コピュラ文が言語の文法では区別されず、コピュラ文にコード化されているのは単一の単純な意味だけであるという可能性を追求することが当初の研究目的であった。具体的には、コードに二つの名詞句を同じ対象に関連付けて解釈せよ といった抽象的意味だけを想定する。二つの名詞句の解釈は、他の文の名詞句解釈と同様、一般的な認知語用論の原理に従って行われる以上、名詞句が果たす各種“意味機能”を、文法的な区別としてではなく、名詞句解釈のパターンとして語用論のレベルで捉えることで、名詞句意味論(名詞句の文中の意味機能に関する文法理論)を簡素化することを目指した。

より詳しくは、以下の3つを解明し、各種コピュラ文の解釈過程と結果をモデル化し、コピュラ文名詞句の解釈多様性が扱える理論を構築することが目的であった。

文中の名詞句一般、特に指示対象がないとされる“非指示的”名詞句の解釈過程・結果

コピュラ(文)にコード化された意味論的意味

上の2つに加えて、冠詞・助詞「は」等にコード化された手続き的意味+コンテキストから、各種コピュラ文の伝えるものが得られる過程

さらに、得られた知見を、名詞句の“意味機能”による曖昧性を持つとされてきた表現や、分析において名詞句の“意味機能”が重要な役割を演じてきた構文(存在文や潜伏疑問名詞句、潜伏命題名詞句)の分析に応用することが副次的な目的であった。

3. 研究の方法

研究申請段階から、「コード化された意味は詳細に規定されておらず、名詞句に対して豊富な語用論的推論が施された結果、多様なコピュラ文の解釈が生まれる」という本研究が追求する観点が、認知語用論の代表的枠組みである関連性理論(スペルベル・ウィルソン 1995/1999)と親和性が高いことは当初から明らかで、これを基本的な理論的枠組として採用することにしていた。本研究の結果できた指示参照ファイル理論を構築するにあたっては、細部に至るまで関連性理論に忠実な理論化を目指すのではなく、言語コミュニケーションのメカニズムについての基本的着想を、関連性理論に着想を得た言語進化の理論(スコット=フィリップス 2015/2021)を経由して引き継ぐことになった。特に、言語コミュニケーションにおいて、話し手と聞き手は、常に互いの心を何重にも読み合っているという洞察は、指示参照ファイル理論の基本的主張「発話中の名詞句の意味は、話し手が推定した聞き手の心の概念構造にある心的表象(指示参照ファイル)である」に受け継がれている。

また、名詞句による指示を考えるにあたり、ジャッケンドフ(2012/2019)の指示についての認知的視座からの議論を援用することが当初から予定されていた。つまり、多くの先行研究のように日常的視座に立って名詞句と指示対象を指示という関係で直接結びのではなく、指示対象に対応する心的表象—ジャッケンドフが指示参照ファイル(reference file)と呼ぶもの—があり、

心において名詞句がそれに関係づけられると考えることにした。そして、指示参照ファイルのデータ構造を拡充することで、名詞句意味論で中心的な役割を果たしてきた非指示的名詞句も含め、多様な名詞句を統一的に扱うことを目指した。

例えば、「学長はあの人だ」の「学長」は、直接対応する対象が世界にないため、(i)従来の名詞句意味論では「x が学長だ」という命題を出力とする関数を表す(西山 2003)とされていた。(ii)当初の構想では、この名詞句を聞いた時点では id 不定の指示対象を一旦指示し、「あの人」に指示関係が付与された後で、それに依存して指示付与が行われると分析できよう、と考えていた。(iii)現時点では、指示参照ファイルの ID には 4 種類(定項、自由変項、束縛変項、null 値)があり、この「学長」は、ID が自由変項の指示参照ファイルに対応し、その自由変項が、「あの人」に対応するファイルの定項の ID で定められることになると分析している。ID が自由変項の指示参照ファイルは、本研究で得られた着想で、未解決事件の犯人や探しているジグソーパズルのピースなどにも対応するものである。

4. 研究成果

【予備的考察】

本研究に本格的に取り組む前に、予備的考察として研究課題に関連する 3 つのテーマに関して口頭発表し、以下の論文を公刊した。

1. 「逆隠喩」と言われる名詞句の意味の変容に関して、本研究が基盤の 1 つとする関連性理論の語彙語用論の観点から従来の分析とは異なる分析を提示した(「佐藤信夫の「逆隠喩」をめぐって：語彙語用論の観点から」『語用論研究』第 19 号)

2. 「舵を取る」などの慣用的意味の成立に(メトニミーと共に)関わっているのはメタファーかシネクドキかという問題に対して、動的使用依拠モデルの比喩のモデルである上位スキーマ化モデルに基づいてシネクドキとメタファーの関係をとらえることで答えを与えることを試みた。その中で、比喩によって生じる語彙レベルの意味の違いと、研究課題の中心テーマである名詞句の文中の「意味機能」の違いによる文レベルの意味の違いを混同するべきでないことを主張した。(「意味拡張における説明概念としてのシネクドキの役割とメタファーとの関係」『日本語・日本文化研究』第 27 号・大阪大学言語文化研究科日本語・日本文化専攻)

3. コピュラ文に頻出する「名詞句+は」の統語的位置について、Role and Reference Grammar の枠組みを使って検討し、同時に名詞句と関連の深い主題と焦点という概念について、認知語用論の観点から検討した。(“Reconsidering the Layered Structure of the Clause in Japanese: Focusing on the NP-wa and Left-dislocation”『EX ORIENTE』第 25 号・言語学会)

逆隠喩・シネクドキについては、研究代表者がコメンテーターを務めたワークショップ「シネクドキの世界：カテゴリー化の言語学」(日本言語学会 第 159 回大会、2019 年)を元にした論文集が計画されていて、研究代表者は共編者となる予定。

【指示参照ファイル理論の基盤となる本の翻訳】

指示参照ファイルによる名詞句の認知意味論・認知語用論の理論の源流となった以下の 2 冊を共訳・刊行した。

1. ジャッケンドフ『思考と意味の取扱いガイド』(岩波書店、2019 年)原著 Jackendoff, Ray. 2012. *A user's guide to thought and meaning*. Oxford: Oxford University Press.)

2. スコット=フィリップス『なぜヒトだけが言葉を話せるのか：コミュニケーションから探る言語の起源と進化』(東大出版会、2021 年)(原著 Scott-Phillips, Thom. 2015. *Speaking our minds: Why human communication is different, and how language evolved to make it special*. Basingstoke: Palgrave MacMillan.)

2 に関して、刊行記念シンポジウム「言語(コミュニケーションへ)の進化」(第 6 回基礎言語学研究会、2022 年)が行われ、研究代表者が同書の概要を紹介した。

【指示参照ファイル理論】

上記 2 冊の知見を踏まえて、名詞句を中心に扱う認知意味論・認知語用論の理論「指示参照ファイル理論」の大枠を構築した。これは、認知的視座からの名詞句解釈の一般理論であり、コピュラ文に限らず、存在文、潜伏疑問名詞句、潜伏命題名詞句など、自然言語の全名詞句の理解を深めるものである。当初の主な研究対象であったコピュラ文については、(倒置)指定文の主語名詞句に対する分析を公にした(“A cognitive-pragmatic account of specificational sentences” International Cognitive Linguistics Conference 2019、「指示参照ファイル理論序説」『日本語・日本文化研究』30: 1-28)。理論の概要と基盤は、「指示参照ファイル理論序説」と「認知的視座からの意味論と形而上学：指示参照ファイル理論と認知形而上学」(『日本語・日本文化研究』30: 29-52)で公にした。

また、指示参照ファイル理論によって、潜伏疑問名詞句、潜伏命題名詞句、所謂変項名詞句の階層を分析した。理論全体の概要とともに、潜伏疑問、潜伏命題などの現象に対する指示参照ファイル理論の分析を提示し、その有効性を示した論文を公刊した。(「潜伏疑問名詞句再考：N-意味理論の分析の批判的検討」『言語文化研究』47)、「変項名詞句の階層を再考する：N-意味理論の分析の批判的検討と指示参照ファイル理論による分析」『東京大学言語学論集』43)、「潜伏命

題名詞句再考：N-意味理論の分析の批判的検討と指示参照ファイル理論による分析」『基礎言語学研究』1）。

これらに加えて、同理論の特質-値などの概念を用いて、「合否」「やるやらない」「善悪」「いいわるい」「男女」「そばうどん」などの名詞とそれが主要部となる名詞句の意味について分析し、口頭発表した（「**並列名詞**とそれが主要部になる名詞句：両者の意味の関係と語彙的特徴」形態論・レキシコンフォーラム 2020 年）。また、名詞句の自由拡充と言われている現象の分析が持つ経験的・概念的問題を指摘し、同理論による分析ではそれらが示す口頭発表も行った（「**名詞句の“自由拡充”が抱える問題とその根源**」第 52 回 日本科学哲学会 2019 年）。どちらについても論文を準備中。

2022 年度からは、基盤研究 C の「**存在文とコピュラ文の解釈多様性と形式的統一性：指示参照ファイル理論による解明**」（22K00553）に引き継がれ、同理論による研究が継続される。

【言語学の科学哲学と基礎言語学研究会】

指示参照ファイル理論を作るという経験から出発した科学哲学的考察を「**言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス**」（『日本語・日本文化研究』第 29 号）にまとめ、理論構築研究をする上で様々な障害があることを述べた。この論文を執筆する際に協力してもらった研究者ら（成田広樹、窪田悠介、田中太一、太田陽）と、ワークショップ「**理論言語学を科学哲学する：生成文法、形式意味論、認知言語学の未来**」（日本言語学会 第 161 回大会 2020 年）を行い、企画・司会・趣旨説明を務めた。このワークショップを元にした論文集が進行中で、研究代表者は共編者となる予定。

また、本研究のような（既存の理論を適用するのではなく）新たな理論を構築する研究は、言語学において少数であり、発表の場を確保する必要があることから、**基礎言語学研究会**を同志達と設立した。本研究会におけるアウトプットは、上述のシンポジウム「言語（コミュニケーションへの）の進化」と『基礎言語学研究』誌掲載の論文に加えて、以下の通り。

- 基礎言語学研究会設立シンポジウム「**言語（研究）の基礎**」（企画・趣旨説明・コメンテーター、2021 年）
- 論文草稿合評会「**潜伏命題名詞句再考：N-意味理論の分析の批判的検討と指示参照ファイル理論による分析**」（論文草稿執筆者、2021 年）
- 科研費ワークショップ「**基礎言語学で科研費は取れるか**」（生徒役、2021 年）

今後も、言語学の基礎・理論・メタ研究をする研究者達と同研究会での企画を準備中。

参照文献

スペルベル, ダン・ウィルソン, ディアドリ. (内田聖二他訳) 1995/1999. 『**関連性理論—認知と伝達—**』（第 2 版）研究社.

西山佑司. 2003. 『**日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句**』ひつじ書房.

西山佑司編 2013. 『**名詞句の世界：その意味と解釈の神秘に迫る**』ひつじ書房.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 山泉実	4. 巻 30
2. 論文標題 指示参照ファイル理論序説	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語・日本文化研究	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山泉実	4. 巻 30
2. 論文標題 認知的視座からの意味論と形而上学：指示参照ファイル理論と認知形而上学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語・日本文化研究	6. 最初と最後の頁 29-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山泉実	4. 巻 47
2. 論文標題 潜伏疑問名詞句再考：N-意味理論の分析の批判的検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 101-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/79327	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山泉実	4. 巻 29
2. 論文標題 言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本語・日本文化研究	6. 最初と最後の頁 44-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Minoru Yamaizumi	4. 巻 25
2. 論文標題 Reconsidering the Layered Structure of the Clause in Japanese: Focusing on the NP-wa and Left-dislocation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 EX ORIENTE	6. 最初と最後の頁 47-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山泉実	4. 巻 19
2. 論文標題 佐藤信夫の「逆隠喩」をめぐって：関連性理論の語彙語用論の観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 語用論研究	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山泉実	4. 巻 27
2. 論文標題 意味拡張における説明概念としてのシネクドキの役割とメタファーとの関係	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語・日本文化研究	6. 最初と最後の頁 50-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山泉実	4. 巻 12
2. 論文標題 佐藤信夫の「逆隠喩」をめぐって：語彙語用論の観点から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本語用論学会第19回大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 231-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 並列名詞（句）の意味論と形態論：選言名詞（句）と連言名詞（句）
3. 学会等名 第119回慶應意味論・語用論研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 「並列名詞」とそれが主要部になる名詞句：両者の意味の関係と語彙的特徴
3. 学会等名 形態論・レキシコンフォーラム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 極性疑問が潜伏している名詞
3. 学会等名 第158回 日本語学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Minoru Yamaizumi
2. 発表標題 A cognitive-pragmatic account of specificational sentences
3. 学会等名 International Cognitive Linguistics Conference 15（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 名詞句の“自由拡充”が抱える問題とその根源
3. 学会等名 第52回科学哲学学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 N-意味理論と指示参照ファイル理論の潜伏疑問と潜伏命題に対する分析
3. 学会等名 第109回慶應意味論・語用論研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 名詞句の自由拡充・タイプAの「NP1のNP2」・アドホック概念による変項の束縛の批判的検討と指示参照ファイル理論による分析
3. 学会等名 第113回慶應意味論・語用論研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 指示参照ファイル理論の基盤
3. 学会等名 2020年3月21日 言語学シュンポジオン
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Minoru Yamaizumi
2. 発表標題 A cognitive-pragmatic account of specificational sentences
3. 学会等名 ICLC 2019 (第15回 International Cognitive Linguistics Conference) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 指示参照ファイルによる名詞句の認知意味論と認知語用論 その 2
3. 学会等名 2018年8月30日 言語学シュンポシオン
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 指示参照ファイルによる名詞句の認知意味論と認知語用論 その 3
3. 学会等名 2018年12月27日 言語学シュンポシオン
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 指示参照ファイルによる名詞句の認知意味論と認知語用論 その 4
3. 学会等名 第1回オフライン哲言語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 認知的枠組みによるコピュラ文と名詞句の分析
3. 学会等名 第101回 慶應意味論・語用論研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 認知的枠組みによるコピュラ文と名詞句の分析
3. 学会等名 第102回 慶應意味論・語用論研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 認知的枠組みによるコピュラ文と名詞句の分析
3. 学会等名 第103回 慶應意味論・語用論研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Minoru Yamaizumi
2. 発表標題 Where is the Japanese NP-wa in the LSC? From the Viewpoint of Left-Dislocation
3. 学会等名 Role and Reference Grammar 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 NP-walはLSCのどこにあるのか 2 : LDP説の根拠の批判的検討
3. 学会等名 2017年9月3日 言語学シュンポシオン
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山泉実
2. 発表標題 指示参照ファイルによる名詞句の認知意味論・認知語用論 その1
3. 学会等名 2018年3月17日 言語学シュンポシオン
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 レイ・ジャッケンドフ著、大堀壽夫・貝森有祐・山泉 実 (訳)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 360
3. 書名 意味と思考の取扱いガイド	

1. 著者名 トム スコット=フィリップス 著、畔上耕介・石塚政行・田中太一・中澤恒子・西村義樹・山泉実 (訳)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 372
3. 書名 なぜヒトだけが言葉を話せるのか コミュニケーションから探る言語の起源と進化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

基礎言語学研究会

<https://tetsugengogaku.wixsite.com/home>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------